

● 学会発表の内容

精液状態に男性因子のない体外受精初回者に対しての SPLIT法(媒精法とICSIを同時に同一症例に行うこと)は受精障害の回避に有効か?

医療法人社団 徐クリニックARTセンター

新居遙 清須知栄子 今井智子 伊藤真理 八木香菜子 徐東舜

■ 【目的】

精液状態が正常であっても、ごく一部の症例において受精障害の症例があることがよく知られている。このような受精障害のリスクを回避するため、SPLIT法を行うことが有効であるという報告もみられる。今回我々は、初回体外受精者に対してSPLIT法を適用することで受精障害を回避できたかどうか後方視的に検討した。

■ 【対象】

2011年1月から2013年12月までの期間にSPLIT法を行った191症例(平均年齢35.1±4.1、体外受精初回)

■ 【方法】

卵子を無作為に分けてSPLIT法を行った。媒精法において受精率が30%以下で、かつ顕微授精法の受精率が媒精法での受精率30%以上の場合を受精障害とした。また、ICSIの受精率が0%であり、媒精法の受精率が30%以上の場合をICSI受精障害とした。

■ 【結果】

191症例のうち4例(2.1%)に受精障害が認められた。一方、191症例のうち2症例(1.0%)でICSI受精障害が認められた。これらを差し引くと、191症例中2例(1.0%)においてSPLIT法により受精障害が回避されたと考えられる。また、対象とした191症例の媒精法、および、ICSIの受精率はそれぞれ73.4%(846/1152)、および、71.2%(651/914)であり、有意差は認められなかった。

■ 【結語】

ごく少数例ではあるが、貴重な体外受精での受精障害症例を回避するという意味では、SPLIT法を行うことに意義があると思われる。